

もどる

# 協応構造、共同注意、心の理論、ほか —共同注意の認知統語論の構想—

本多 啓 (駿河台大学)

## 目次

1	理論的な道具立て	2
1.1	「共同注意」あるいは「三項関係」	2
1.2	共感の源泉: 「同じものを見る」と「協調して動く」	3
1.2.1	<見え>の共有と共感と「心の理論」	3
1.2.2	協調行動と共感 (cf. 後安さん)	3
1.2.3	二つをつなぐもの (小野 (2002))	3
1.3	意味の「不定性」あるいは相互行為性	4
1.4	言語発達の二つの段階: 「指し言語」 「語り言語」 (Reed (1996))	5
1.5	文法化	5
2	指し言語の諸相	6
2.1	一語文	6
2.2	一名詞句文 (連体修飾構造)	8
2.3	現象描写文 (仁田 (1991))	10
3	語り言語	11
3.1	左方転位	11
3.2	無助詞格成分	12
4	非視覚的な共同注意	13
4.1	視覚以外の感覚モダリティ	13
4.2	共同想起	13
	参考文献	14

# 1 理論的な道具立て

- 共同注意
- 「心の理論」のひとつの基礎としての<共感>
- 意味の「不定性」あるいは相互行為性(岡田 (2000))
- 言語発達の二つの段階(Reed (1996))
- 文法化(Givón (1979))

## 1.1 「共同注意」あるいは「三項関係」

- (1) a. 太郎が注意を向けているもの X に、私も注意を向ける (gaze following)。
- b. 太郎の注意を、私が注意を向けているもの X に向けさせる。そのために、太郎の注意をまず私に向けさせる。
  - 指さし: (imperative/declarative pointing)
  - 物の提示:
- c. 私と太郎が同じもの X に注意を向けている。
- d. 私と太郎が同じもの X に (ほぼ) 同じ位置からから注意を向けている = <見え> の共有
  - 共感 = 心の理論のひとつの基盤(子安 (2000: 第4章))
  - 言語理解の基礎としての「視点を重ねる」こと(浜田 (1999))
- e. 私と太郎は、同じもの X に注意を向けながら、その X をめぐって協調行動をしている (joint engagement) エンタテインメント 共感

## 1.2 共感の源泉: 「同じものを見る」と「協調して動く」

### (2) a. <見え>の共有

b. 身体の同期 (エントレインメント) (佐々木 (1987), Condon (1976), 渡辺 (2000, 1999))

cf. 小嶋 (2002): 「共同注意」と「モデリング」

### 1.2.1 <見え>の共有と共感と「心の理論」

#### (3) a. 移動可能な知覚者にとっての、観察点の公共性

b. それに伴う、<見え>の共有

c. それに伴う、エコロジカルな自己知覚の共有

d. それに伴う、私的自己 (感情の宿る場としての自己 (Neisser (1988))) の知覚の共有感

- <見え> 先行方略 (宮崎・上野 (1985))
- 「心の理論」のひとつの基盤 (子安 (2000: 第4章))
- cf. 寄物陳思 (池上 (2002))

### 1.2.2 協調行動と共感 (cf. 後安さん)

### 1.2.3 二つをつなぐもの (小野 (2002))

- 音声を使って人に道案内をするロボット
  - ジェスチャーをする vs. しない
  - 相手と同じ方向を見る vs. 見ない
- 身体の同期 共同注意 (<見え>の共有) の成立 伝達の成立
- 共感の度合いも対応

### 1.3 意味の「不定性」あるいは相互行為性

- 岡田 (2000: 1.3): 「投機的な行為 (entrusting behavior)」と「それを支える行為 (grounding)」
    - － 行為や発話の意味に対して、行為者・発話者が全面的な責任を持てるわけではない。
    - － 発話の意味の不定性を悟りながら、それをいったんは他者に委ね、その意味を支えてもらうという方略への転換が必要
    - － そもそも自分が「話し手」であることは、相手が「聞き手」になってくれているということに支えられている。自分が発した言葉を相手が受け止めてくれなければ、言葉中に浮いてしまって意味をなさない。
    - － 行為者としての自分の視点からは、自分の発する言葉の意味は不定なまま。「どうなってしまうか分からないけれど、相手に委ねてしまおう」という潔さが必要。結果としての「何かに支えてもらった、相手に裏切られなかった」という安堵感。
  - 共同注意的な状況においては、モノローグと対話の区別が意味を失う。
- cf. <見え> 先行方略: 相手が自分の位置に来て自分と同じように事柄を見てくれることを期待。

## 1.4 言語発達の二つの段階:「指し言語」「語り言語」(Reed (1996))

(4) 共同注意的な場面 (相手がこちらからの働きかけを受け入れる体勢にあるような場 / グラウンディングが期待できる場)の中で

a. 「指し言語」:

- トピックを選択し、相手の注意をそれに向けさせる言語。
- 相手の前に題目を投げ出す言語。

b. 「語り言語」:

- トピックを選択し、相手の注意をそれに向けさせた上で、それについて語る言語。
- 相手の前に投げ出した題目について語る言語。

Reed が考えているのは、個体の言語発達のあり方。  
日本語の文構造の成立をこの観点から見直してみる 文法化。

## 1.5 文法化

Givón (1979)

Diachronic	Loose parataxis	Tight syntax
Ontogenetic	Early pragmatic mode	Later syntactic mode
Pidgins-Creoles	Nongrammar	Grammar
Register level	Unplanned informal speech	Planned formal speech

## 2 指し言語の諸相

- 一語文
- 一名詞句文 (連体修飾構造) cf. 喚体
- 現象描写文

### 2.1 一語文

(5) ごきぶり！ / お茶！

(6) a. <モノ>の提示に相当。

b. ただし言語という表象を用いている。

<モノ>の表象を題目として投機

(7) a. 尾上 (2001b): モノローグ的

b. 宇野・池上 (未刊): 共同注意との関連 対話的

c. ここでの見方: 共同注意が成立している状況では、モノローグが対話性を帯びる モノローグ / 対話の区別自体が意味をなさなくなる。

(8) 「お～い、お茶！」

a. 「お～い」: 相手の注意を自分に向けさせる。

b. 「お茶!」: 自分が注意を向けているものを相手に提示する。

(9) a. お～い、お茶が飲みたいぞ、入れてくれ！ / そこにあるお茶をとってくれ！ (存在希求)

b. お～い、お茶が入ったぞ、一緒に飲もう！ (存在承認)

(10) 「お代わり！」 — 「はい、お代わり」 (希求 承認)

(11) <希求>等の気持ちの伝達の方略

a. 純粋な<見え>先行方略に任せる: (12)

b. ジェスチャーを伴う: (13)

(12) 尾上 (2002) (喚体句について)

発話現場において話者の心に浮かんだものを、(なぜ浮かんだかを言わず)ただコトバにして発する。それを心に浮かべた話者の心情は、聞き手に了解される。述語を使わないで(=述べないで)意味が伝達される文である喚体句とは、そのような特別な意味表現のあり方をする文なのであった。話者の心を場としてあるモノ(またはコト)が浮かぶ、その浮かんだモノ(コト)だけをことばにして発するというタイプの文であり、そのとき話者は無化される。この伝達(理解)は聞き手責任に委ねられる面が極めて大きい。

(13) a. ジェスチャー

- お茶を指差す。(redundant)
- 空の手を差し出す。(存在希求)
- お茶の入った湯のみを差し出す。(存在承認)

b. 発話とジェスチャーがトピックとコメントに対応することがある(「ねえお茶!」と言って空の手を差し出す場合など)

語り言語(題目—解説という構造をもつ文)に移行する準備段階(Reed (1996))

題目語から主語への文法化: 日本語では起こっていない。日本語の主格「が」は所有格に由来。

## 2.2 一名詞句文 (連体修飾構造)

(14) a. きれいな花！

b. ひろい部屋！

(15) <モノ>または<コト>の、表象を用いた提示。

<モノ>または<コト>の表象を題目として投機

尾上 (2001a):

- 表現機構の点で喚体と共通している点があるが、喚体とは区別される。
- 一語文と同じ表現機構 ~ 感動喚体と希望喚体

(16) 発話現場において話者の心に浮かんだものを、(なぜ浮かんだかを言わず)ただことばにして発する。それを心に浮かべた話者の心情は、聞き手に了解される。述語を使わないで (= 述べないで) 意味が伝達される文である喚体句とは、そのような特別な意味表現のあり方をする文なのであった。話者の心を場としてあるモノ(またはコト)が浮かぶ、その浮かんだモノ(コト)だけをことばにして発するというタイプの文であり、そのとき話者は無化される。この伝達(理解)は聞き手責任に委ねられる面が極めて大きい。そのような話しことば的な聞き手依存が和歌などの書記言語においてさえ定型として公認されているところに、日本語の伝達の聞き手依存性の高さが見てとれる。(尾上 (2002))



フィリピン諸語における一名詞句文: exclamation を表す (Shibatani (1991: 108))

(17) a. Ka-gwapu        sa    imung balay! (Cebuano)  
      NOMI-beautiful GEN your    house  
      ‘How beautiful your house is!’ (lit: The beauty of your house!)

b. Ka-taas    ni    Juan! (Cebuano)  
      NOMI-tall GEN Juan  
      ‘How tall Juan is! (lit: Juan’s tallness!)

c. Ka-bait        ni    Maria (Tagalog)  
      NOMI-kind GEN  
      ‘How kind Maria is! (lit: Maria’s kindness)

(18) (17) に対応する日本語の現象その 1

a. 夜空を貫く白球の美しさよ

b. 人の世のはかなさよ

(19) a. 所有格から主格への文法化:

cf. 「我が家」 / 「私がやりました」, 「私の家」 / 「私の住んでる家」

b. 係り結びの消失に伴い、連体形 (名詞句相当) が終止形としての機能を帯びる。 (尾上 (1982))

## 2.3 現象描写文(仁田(1991))

(17) に対応する日本語の現象その2

(20) a. 雨が降っている。

b. わあー、空がとても青い。

c. 見てみな、波が荒いよ。

d. おーい、山の端が真っ赤だ。

(21) a. ある時空の元に生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝えたもの。

b. 主観の加工・判断作用を加えていない 判断のモダリティは存在しない。

c. 無題文

d. 文全体が新情報。

(22) <コト>の、表象を用いた提示。

<コト>(の表象)を分析せずに丸ごと題目として投機

(23) 眼前状況を表す現象描写文

a. 子供が運動場で遊んでいる。

b. あっ、向こうからお嫁さんが来る/来た。

c. \*私/\*あなた/子供が走っている。(仁田(1991: 127))

近接未来の兆候を表す現象描写文

d. あっ、荷物が落ちる。

過去の出来事を報道する現象描写文/現在有している予定を表す現象描写文(例文は略)

### 3 語り言語

#### 題目語

vocatives と topic(Lambrecht (1996))

#### 主語への文法化

日本語はこれはない。

#### 3.1 左方転位

(24)(日記本文)

空港のトンカツ屋とは  
私の愛する「かつくら」ですね！

(やや離れたところにあるコメント)

YADA (2002/07/21 (Sun) 18:29)

かつくら。あそこはいいね。

あさ (2002/07/21 (Sun) 18:43)

うん。実にいい。

(<http://www.team1mile.com/asarin/tdiary/?date=20020721c01>)

### 3.2 無助詞格成分

(25) a. はさみある？

b. はさみはある？

c. はさみがある？

(26) a. 朝ごはん食べた？

b. 朝ごはんは食べた？

c. 朝ごはんを食べた？

指し言語的な表現としての一名詞句文が(文法化を経て?) 語り言語に組み込まれたもの。

- 指さし / 目配せ に類似した提題の手法 (三上 (1960))
- 「取りだし」 (丸山 (1996))
- 主節現象 / 脱焦点化 (加藤 (1997))

(27) a. 無形表示は中立的 (無色)。ハやガのような排他性を持たない  
ハやガで排他性が強く出すぎるときには無形表示を使う。

b. ハは本来大きな結合を担い、ガ (ヲ) は小さな結合を担うが、  
無形はその両方が可能。

c. 題目提示のハ: あらかじめ対象を措定

無形の取り出し: 発話の時点で取りだし設定 基本的に、一  
語文及びその延長としての二語文と同じ機能。

(丸山 (1996))

(28) a. ぼく、うなぎ。:

「ぼく」と「うなぎ」という二つの対象を並べたもの

b. ぼくはうなぎだ。: 分析的な記述

(丸山 (1996))

(杉浦 (1991))

(29) a. 今日の空、青いね。

直接的に対象そのものを「今日の空」と提示して、それについて「青いね。」と述べている。この場合の「今日の空」は独立語的。

b. 今日の空は青いですね。

「今日の空」と「青い」ということを「は」で結び付け、題目 - 解説という構造を作っている。分析的であるがゆえに、現場性がうすらく。

c. 空が青いね。

「空が青い」ということを一つの事態として一体化して述べている現象描写文。  
(丸山 (1996))

## 4 非視覚的な共同注意

### 4.1 視覚以外の感覚モダリティ

(30) 「暑いですねえ」「ほんと、たまりませんねえ」

phatic communion における共感の源泉のひとつ

<体感性> と <主語がなしの文> との間につながりはあるか。

- 共同注意の対象を輪郭のある <個体> として捉えることができるか、漠然とした広がりとして捉えることになるのか。
- 指さしで示すことができるか。

### 4.2 共同想起

共同想起: 眼前にないものへの共同注意を成立させる方略?

(岡田 (1997))

もどる

## 参考文献

- Condon, William S. (1976) “An Analysis of Behavioral Organization,” *Sign Language Studies* 13, 285–318.
- Givón, Talmy (1979) *On Understanding Grammar*, Academic Press, New York.
- Lambrecht, Knud (1996) “On the Formal and Fuctional Relationship between Topics and Vocatives. Evidence from French,” *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, ed. by Goldberg, Adele Eva 267–288, CSLI Publications, Stanford.
- Neisser, Ulric (1988) “Five Kinds of Self Knowledge,” *Philosophical Psychology* 1–1, 35–59.
- Ono, Tetsuo, Imai, Michita, and Ishiguro, Hiroshi (2001) “A Model of Embodied Communications with Gestures between Humans and Robots,” *Pocceedings of twenty-third Annual Meeting of the Cognitive Science Society (CogSci-2001)*, 732–737.
- Reed, Edward S. (1996) *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*, Oxford University Press, Oxford. (邦訳:『アフオーダンスの心理学 生態心理学への道』(細田直哉訳、新曜社、2000年)).
- Shibatani, Masayoshi (1991) “Grammaticization of Topic into Subject,” *Approaches to Grammaticalization Volume II Focus on Types of Grammatical Markers*, ed. by Traugott, Elizabeth Closs and Heine, Bernd 93–133, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam and Philadelphia.
- 池上嘉彦 (2002) 「「<モノ>と<コト>、そして<トコロ>—日本語における<主観性>をめぐる—」. (池上・尾上 (2002)).

池上嘉彦・尾上圭介 (2002) 「コトの出来 (しゅったい) する場としての自己 — 日本文化への認知言語学的アプローチ —」. (文法学会 第4回集中講義).

宇野良子・池上高志 (未刊) 「ジョイントアテンション・予測・言語 ~ 志向性をそろえるメカニズム ~」. 『認知言語学論考 No. 2』収録予定.

岡田美智男 (1997) 「コミュニケーション ~ 雑談 ~ における構成的な理解にむけて」. 補聴と聴覚活用を語るサマーフォーラム in 横浜記念講演 (1997/ 7/26 AM10:00-12:00) (<http://www.mic.atr.co.jp/okada/Reports/Draft.97.7.26.html>).

岡田美智男 (2000) 「社会的な相互行為とそのリアリティを支えるもの」. 岡田美智男, 佐々木正人, 三嶋博之 編, 『身体性とコンピュータ』, 共立出版, 東京, (『bit』別冊).

尾上圭介 (1982) 「文の基本構成・史的展開」. (尾上 (2001b: 109-127)).

尾上圭介 (2001a) 「文の意味の成立、喚体と述体」. (尾上 (2001b: 第一部)).

尾上圭介 (2001b) 『文法と意味I』, くろしお出版, 東京.

尾上圭介 (2002) 「話者になにかが浮かぶ文—喚体・設想・出来文・情意文—」. (池上・尾上 (2002)).

小野哲雄 (2002) 「道案内ロボットと身体表現」. 『言語』 31-3, 56-61, (2002年3月号).

小野哲雄・今井倫太・石黒浩・中津良平 (2001) 「身体表現を用いた人とロボットの共創対話」. 『情報処理学会論文誌』 42-6, 1348-1358 .

- 小野哲雄・今井倫太・江谷為之・中津良平 (2000) 「ヒューマンロボットインタラクションにおける関係性の創出」. 『情報処理学会論文誌』 41-1, 158-166 .
- 加藤重広 (1997) 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」. 『富山大学人文学部紀要』 27, 19-82,  
(<http://jinbun1.hmt.toyama-u.ac.jp/gengo/kiyo27.htm>).
- 小嶋秀樹 (2002) 「Infanoid は人の痛みを分かりたい」. (日本認知科学会第19回大会ワークショップ: 「ヒューマンロボットインタラクションにおける認知」).
- 子安増生 (2000) 『心の理論: 心を読む心の科学』, 岩波書店.
- 佐々木正人 (1987) 『からだ: 認識の原点』, 東大出版会.
- 杉浦滋子 (1991) 「「だ」の意味 — 「うなぎ文」をめぐる —」.  
『東京大学言語学論集』 12, 81-95.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.
- 浜田寿美男 (1999) 『「私」とは何か: ことばと身体の出会』, 講談社, 東京. (講談社選書メチエ 170).
- 丸山直子 (1996) 「話しことばにおける無助詞格成分」. 日本認知科学会第13回大会ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐる」  
(<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/96workshop.html>)  
における口頭発表  
(<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/maruyama.html>).
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い—日本文法入門』, くろしお出版, 東京.
- 宮崎清孝・上野直樹 (1985) 『視点』, 東京大学出版会, 東京.
- 渡辺富夫 (1999) 「エンタテインメント(引き込み)と親子の絆」. 正高信男 編, 『赤ちゃんの認識世界』, ミネルヴァ書房, 京都.



渡辺富夫 (2000) 「身体的コミュニケーションにおけるエンタテインメント」. 岡田美智男, 佐々木正人, 三嶋博之 編, 『身体性とコンピュータ』, 共立出版, 東京, (『bit』別冊).